

# 三浦ヒロ・戸倉ハルとその時代

松本千代栄

(お茶の水女子大学)

## I 概観

### 1) 国家・制度

三浦ヒロ(明31~平5)、戸倉ハル(明29~昭43)の時代——とりわけ学校教育の「遊戯」研究と教育を負われた約30年の年月は、日本の史上に類をみない激動の時代であった。即ち 前半は、第1次世界大戦の終結(大6)後、大学令公布(大7)、小学校令改正(大8)、高等女学校令改正(大9)と学校制度が整い、また、「学校体操教授要目」(大2)が公布され、体操・遊戯・教練の教材とその段階的な指導が示された。続いて同要目の改正(大15)更に改正を重ねて(昭11)、教材はより豊かになり、「遊戯」領域は拡充された。しかし要目の充実は、同時に要目中心主義の学校体育へ向う趨勢に向った。(参照:略年表)

他方、教育勅語と教科書の国定によって方向づけられた学校教育にあきたりず、国際的な自由主義風潮をうけて、「自由主義教育」「新教育」の論と実践がおこるなかで、個性尊重の教育、多彩な芸術教育運動が展開される。

「律動的表情遊戯」「スクールダンス」「教育ダンス」「行進遊戯と唱歌遊戯」など多くの訳書、著作名称にその側面をみる事ができよう。(参照:舞踊学4号「明治期の舞踏的遊戯」著書一覧 P9、

舞踊学6号「大正・昭和前期の舞踊教育」関係書一覧 P14~15)表現と自己開発の華ひらこうとする“明”の時代である。

後半は、南京事件(昭2)満州事変(昭6)と時局は次第に波立ち、日中戦争(昭12)から第2次世界大戦(昭14)の勃発となり、戦時統制の強まる苦渋の時代である。

国民学校令(昭16)「国民学校体錬科教授要目」(昭17)「師範学校体錬科教授要目(昭18)と相次ぐ教育の指針には、「体操」は「体錬」と名称を改め、教材は軍事色を強化し、「遊戯」は「音楽運動」となり、「体錬科」は戦力増強をその目標に掲げる時代となる。“暗”の時代である。

明暗をわけた大正・昭和前期の劇的な年月は、敗戦(昭20)によって終止符が打たれる。(参照:略年表)

昭和22年、「学校体育指導要綱」は、「運動文化の本来の特性」(体操・スポーツ・ダンス)をいかし、「人間形成」の体育を標榜する。即ち、明治・大正・昭和前期の「教材を教える」遊戯から、「自己表現をひきだす」ダンスとして新しい転換を示した。換言すると、学校における“教材”としての“唱歌遊戯、行進遊戯”は、舞踊文化と共通の地平に立つ“ダンス”(表現とフォークダンス・

昭和十九年  
中等学校体錬科教授要目(一部分)

動 運 楽 音	
旭 追 強 應 基	基
用 本	本
態 態	尖 歩
日 風 歩 勢 勢	法
勝 旭 應 基	基
ろ	本
が	尖 歩
ね	尖 歩
の	尖 歩
関 力 日 勢 勢	法

昭和十一年六月改正  
學校體操教授要目(一部分)

戲 遊 進 行 及 戲 遊 歌 唱		
戲 遊 進 行	戲 遊 歌 唱	習 練 本 基
ツロイカ アイリッシュユリルト	幼き頃の思出	基本歩法 バスケットステップ ミニユエットステップ 基本態勢 應用態勢
グリーディング マツルカ	荒城の月	胡蝶
スコッチキャップ ポルカセリーズ ヴィンヤード ギャザリングピース マツルカ		

女學校及女子實業

社 会	年	制 度	東京女高師	関 連
日露戦争	明37	体操遊戯取調委員会 同調査報告	委員 坪井玄道、井口阿くり 永井道明 欧米留学 (明38~42) 保育実習科設置 (明39) 東京女子高等師範学校 (改称明41) 二階堂トクヨ (明37文科卒) 44助教授 高橋キャウ国語体操科卒 (明44)	坪井「舞踏踏法初歩」(明40)  奈良女子高等師範学校設置 藤村トヨ東京女子体操音楽学校校長 (明41) 奈良女高師附属小開校 (真田幸憲)
明治天皇崩御 第一次世界大戦 第一次大戦終結 パリ講話会議 国勢調査 ワシントン軍事会議	大2 3 4 5 6 7 8 9 10	「学校体操教授要目」(大2)  臨時教育会議改革答申 大学令公布 小学校令改正 高等女学校令改正	二階堂トクヨ 英国留学 (大元~  高橋助教授就任 戸倉ハル臨教育家事科入学 三浦ヒロ文科入学  戸倉ハル高知師範赴任  附小新教育開始: 三浦ヒロ附小就任	芦田恵之助「読み方教授」(大5) (“自己を読む”の提唱) 鈴木三重吉「赤い鳥」創刊 (大7) 木下竹次奈良女高師附小へ (大8) “合科学習”(大9) アインシュタイン歓迎会 (相対性原理講演)
関東大震災 NHK放送開始 南京事件 大学「赤」化取締 世界恐慌 満州事変 大日本国防婦人会 国連脱退 大凶作	11 12 13 14 昭2 3 4 5 6 7 8 9	「学校教練教授要目」公布 「学校体操教授要目」改正 幼稚園令 思想問題訓令 学校医・幼稚園医令 公布 「高等学校高等科体操 思想局、(文部省) 教授要目」	二階堂退職、戸倉ハル研究科入学 三浦ヒロ 欧州留学  三浦ヒロ 教授 (大15) ( 教 国語体操専修科 員 M. 36. 38, 40. 42入学 養 体操家専科 成 T. 7, 11, 13 S元年, 4, 7, 10入学 家事体操科(S16) 体操科 S19 戸倉ハル東京女高師助教授就任 (同教授 (昭13~))	「二階堂体操塾」創立 (大11) 校舎焼失 下田次郎「運動競技と国民性」刊 (大12) 東女高師開校50年 皇后陛下行啓 宮田寛造「体操科教授の原理と其実際」(昭2) レビュ: モンパリの初演 (宝塚劇場) 歌曲「出船の港」中山晋平・藤原美江 「松島音頭」山田耕平・北原白秋 皇后陛下行啓 (体操ご覧) ニールスブック来校 「女子体育」創刊 東京体操音楽学校 (昭6)  東京宝塚劇場開場
2・26事件 日中戦争始まる 国家総動員法 第二次世界大戦 真珠湾攻撃 学徒出陣 敗戦、原爆	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	青年学校令 「学校体操教授要目」改正 「学校教練教授要目」改正 体力章制定 (厚生省) 軍事教練 (大学必須) 国民体力法 公布 国民学校令 公布 「国民学校体操科教授要目」 「師範学校体操科教授要目」 決戦非常措置要綱 戦時教育令 公布	三浦ヒロ退職 佐々木等着任 竹之下休養 着任 体 育 科 (新設) (体育・音楽専攻) 必修課目制 運動会、全校遠足 教育・心理 演奏会 演奏旅行 美術・体育学・体育実技 音楽史・楽典 教育実習 器楽・声楽 全寮制 合唱・他 就職義務年限2年 音楽教官: 小松耕輔、平井美奈、宅孝二、 奥田良三、豊増昇、遠見豊子、加古三枝子	「女子体育振興会」(佐々木・竹之下他) (昭11) ベルリンオリンピック (西田順子) 女子体育展覧会 (上野・松坂屋) 振興会主催 「愛国行進曲」、国民精神総動員 応募作 (総理大臣賞) (昭12) 行啓 (昭15) 松本・奈良女高師附属校赴任 (昭16) 松本・東京女高師研究科進学 (昭18) 動員 陸軍造兵廠他 19劇場休場 皇国1359号工場で1年入学式 (長野)
日本国憲法 教育基本法 学校教育法 朝鮮戦争 日米安保条約	21 22 23 24 25 26	GHQ管理 学校体育委員 「学校体育指導要綱」(昭22) 新制高校、新制大学 「学習指導要領、 小学校体育編」	お茶の水女子大学設置 (昭24) (教育学科 体育学専攻) (戸倉ハル定年退官・昭37)	松本奈良女高師小赴任 女子大学連盟結成 GHQニューヘルト、東体育局長 ダンス学習 (奈良・松本) 視察 (昭23) 日本体育学会設立

(問題提起) 明暗の際立つ時代から「われわれの時代にとって舞踊とは何か」を考え、今何をなすべきかを考える。

- 例: 1) 芸術教育における“追体験”と創作
- 2) 芸術教育としての discipline と個の Originality
- 3) 音楽・詩歌と身体表現 — 感情移入、美的感覚・感性、意味
- 4) 人間発達と舞踊教育カリキュラム・学習法 — 目的論を含めて
- 5) 教職教養としての舞踊理論 (学)・研究法 (個人研究・共同研究)

ひたむきな外来文化の摂取と  
多彩な展開・新作 (教材) の創出。  
急速に統制化する暗い時代の  
中での存続の努力。  
旺盛な意欲と使命感。

要  
目  
遵  
守  
の  
姿  
勢

民踊)として、創造と伝統の2局面を見据えて、個と集団をひらくことになる。

学校体操教授要目(昭11)、同(昭19)の表記法(参照:別表)は、その激動の時代とゆれ動く教育を如実に語るものであろう。

## 2) 社会文化・教育

学校教育をつつむ社会文化の流れとしては、大正期の芸術教育運動を見逃せない。童話、童謡詩、自由画、作曲などの各分野を擁して、より自由な表現を求める活動がおこる。鈴木三重吉の「赤い鳥」創刊(大7)、山本鼎の「自由画教育」(大10)の提唱などである。「尋常小学唱歌」にあきたりないで新しい童謡を求めた「赤い鳥」には、北原白秋、西条八十、野口雨情らの自由詩が中山晋平、弘田龍太郎、小松耕輔(後、東京女高師体育科新設時の音楽主任教授)らの作曲を得て、童心と風土を愛した童謡を世におくり出す。また「コドモノクニ」などの出版活動とあわせ、自由の歌曲はひろがり、童謡舞踊などもその風をうけておこった。

その後、関東大震災、金融恐慌の中で多くの出版は廃刊となったが、戦後の新童謡運動は、サトーハチロ、野上彰らが展開、中田喜直、宅孝二(後、東京女高師教授)らが作曲に応じている。後に、幼児の唱歌遊戯を童心豊かにうたいあげた戸倉ハルもこの期の詩情と叙情性を湛えていたとみられよう。

他方、国語教育にも「自己の想いを自己の言葉で」を主張した芦田恵之助がある。自己の内省を生かした国語教育は「綴り方教授」(大2)の著となり、読み手の主体を尊重する「自己を読む」主張は多くの支持者を得た。三浦ヒロは芦田に師事し、国語教育研究会に長くかかわった。芦田の“自己を読む”読み方の理念は、三浦の遊戯指導観にも反映しているとみられよう(後述、三浦ヒロ)。前述の外来文化の摂取、導入を進めた明治期をうけての著作にも、美の哲理を探求しつつ新舞踊を求める旺盛な意欲が認められる。

また、運動文化としての着目は、自然的、審美的な考えに基づいて、人間の動き自体の美しい流れをめざしたリズム体操・表現体操(ボーデ R. Bode やメンゼンディーク Beso. M. Mensendieckら)の理念と方法にも眼をひろげる。自己の覚醒・芸術と自然を求めた当代の風潮は、多くの著作の舞踊観の骨子をなしていたとみられよう。例えば、高橋キヤウ(東京女高師国語体操科卒、明44)は、後年、その著「行進遊戯」(昭4)に、“学問を、宗教を、其の他なべてのものを他より移し入れてつねによりよく我れに化し育てて居ります。舞踊も亦其のようにあらせたいと存じます”と述べ、外来文化としての舞踊を“Folk Dance, Country Dance, Aesthetic Dance, Gymnastic Dance, Interpretative Dance, Ballet”と分類し、学校で行われるものを、“民俗舞踊、審美的舞踊、体育的舞

踊、描出舞踊”とし、行進(遊戯)を加えた分類を示している。高橋キヤウは、また“文は人なりといふ。読書は自己を読む(傍点筆者)ものだと書く。舞踊は自己を踊るものである”と記し、自己を踊る表現として、芦田の思想の反映をも思わせ、当代の志向した舞踊観を明瞭にしている。

また、升元一人は「系統的教育舞踊指導書」(昭9)で、新しい体操の道をひらいたグーツムーツ J. GutsMuths やリング P. H. Ling から、デルサルト F. Delsarte の表現に着目し、ダルクローズ E. J. Dalcroze やボーデ R. Bode などの美的自然的な律動の動きの体系を辿りつつ、ダンカン I. Duncan、ラバン R. Laban、ヴィグマン M. Wigman の出現をとらえ、舞踊表現の系譜を表示し、より巨視的に運動文化をとらえて舞踊の本質に迫ろうとしている。外来文化を摂取し、自立の道を求めたこの時代を象徴する思索の道程の1つの証であらう。

多くの著書には、要目尊守の国家主義時代が色濃く反映し、要目尊守の精神を説きつつ、新しい舞踊文化を模索するこの時代の意欲と識見をみせている。美の思索への接近と芸術への志向が国家統制の時勢との相剋の中で、ひそかに葛藤しつつ胎動をみせる時代と読みとられよう。

官学に籍をおき、文部省指針の推進を負われた三浦ヒロ、戸倉ハルの両者も、その相剋の時代を中心にあったことを心に留めなければならない。

## 3) 新教育思想・学習研究

海外教育思想を積極的に求めた明治期文教政策の中で、留学生の欧米派遣(井口阿くり 明32、永井道明 明38ら)、欧米からの招聘教授(音楽の L. Mason ら)、欧米書の翻訳(「斯氏教育論」明13等)、が進められ、欧米の近代教育思想は、大正期の体育、遊戯研究にも大きい影響を及ぼした。

「遊戯」はそれ自身で経験的価値と修練的価値をもつとみた遊戯観(ルソー)、生を補充し、調和し、充足するものとしたグーツムーツやフレーベル、人間の調和的發展をめざしたペスタロッチの開発教育などと共に、日本古来の“あそび”の概念も求められ、形式的な体操の一角を切りくずし、新しい遊戯論と実践を迎え入れるようになる。具体的には、和洋の音楽をとり入れた「小学唱歌集」(文部省音楽取調掛編纂 明15~17)の刊行により、唱歌は明治20年代には全国に普及し、教材としての「唱歌遊戯」としての隆盛をもたらすようになる。「遊戯論」としての人間の開放と自由の思想、情動をゆり動かす感情の教育としての音楽との相乗を得て、美と自然な心情を育む身体活動として唱歌遊戯は体育に位置をしめ、前述の芸術教育運動の所産とともに人々に受け入れられた。

他方、デューイ(J. Dewey)の来日、その訳書の刊行(大9)、キルパトリック(W. T. Kilpatrick)のプロジェクトメソッド(訳書大11)、ダルトン

(Dalton 町名)プランなど、児童中心の教育思想の導入は、その実践的な成果を各学校に根づかせる。

即ち、奈良女高師附属小学校設立当初の主事眞田幸憲は「分団教授法原義」(大7)によって小分団編成の教育をもって個性の伸長をはかり、後をうけた木下竹次は自学主義に立つ「合科学習」の実践をひらき、「学習原論」(大9)の刊行をみる。「生活即教育」の考えのもとに個別学習、問題解決学習を展開し、先駆的な成果をあげる。ここでの新教育は全国の注目するところとなり、自由創造の学習の理念は今日に続いている。「総合的な学習」として、文部省が教科をこえて自ら考え、工夫し、仲間と出あう自発的学習を推進しようとしている平成の現在、大正初期の先人の先見性と理想の堅持、および教育方法の開拓には、あらためて注目される。

更に、大正期の個性、自発性の尊重の教育思想の中では、新しい「学校」の設立が進められた。成城小学校(沢柳政太郎、大6設立)でのドルトン・プランの実践、大正12年頃からの自由学園(羽仁もと子大10)の生活教育、玉川学園(小原国芳)の全人教育論、などがおこり、各々の校風をもって新教育がひらかれる。

大正デモクラシーの自由の中で、新教育思想とその実践が漸く開花をみようとするとき、国家は戦時に突入し、すべては中断されることになる。

#### 4) 国立大学——東京女子高等師範学校

三浦ヒロ、戸倉ハルが学んだ東京女子高等師範学校は、女子の教員養成機関として設立された「東京女子師範学校」(明8)にはじまる。後「女子高等師範学校」(明23)と改称され、文科、理科の二分科制、後に技芸科が加えられ三分科制をとる。(明31)

所謂鹿鳴館時代には学内で舞踏も行われ、また坪井玄道(併任)のダンスの導入など、欧化政策の風の中で、文部省は井口アクリ(明25卒)を体操研究でアメリカに派遣、3年余の研究の後に同校教授に採用。井口は体育の広汎な問題を検討した「体操遊戯調委員会」(明37)の委員をつとめた。また二階堂トクヨ(明37卒)は、英国に留学し体操研究、後母校助教授となる(明44)。後に二階堂塾を設立(現日本女子体育大学)。「女子の最高学府」という気概をもつ女性の勉学の場で、体育の分野を拓く人々も育まれた。奈良女子高等師範学校設置と共に、「東京女子高等師範学校」と改められ(明41)、東西の女高師として女子の学問の府の充実がはかられた。戦後、新制大学制度の中で「お茶の水女子大学」となり現在に至る。

女子教育に先立って幼児教育はまず同校で推進された。東京女子師範学校附属幼稚園開設(明9)とともにフレーベルの恩物(Gabe)教育は、松野クララ、豊田英雄らによって導入され、その理論

と実際は幼稚園教育の基礎を確立した。

前掲の坪井玄道の「舞踏法初歩」(明40)、高橋忠次郎(併任)の「音楽応用女子体操遊戯法」(明33)、大正2年初の「学校体操教授要目」(文部省)の作成にあたった永井道明(併任)の「文明的国民家庭体操」(明44)等の刊行とともに、舞踊、遊戯、体操など運動の特性と方法が次第に豊かにとりいれられる。

これらの欧米文化摂取の時代と学を求める校風の中に、戸倉ハルは入学(家事体操科、大4)卒業後は高知師範に奉職、再び研究科に進学(大11)。三浦ヒロは文科に入学(大5)、卒業後は附属小学校に奉職(大9)、「新教育」を経験する。その後文部省派遣として欧州視察(大12)、昭和元年に同校教授となる。戸倉ハルは昭和8年に同校助教授に就任したが、三浦は昭和10年に退職。同時期に学び、同校の教壇に立ちつつも、共々に、交流した年月は短い。思索の人、感覚の人の双璧を欠いたことは、この分野の発展にとって今も惜しまれることである。

三浦ヒロ、宮田覚造の退職後、佐々木等が着任(昭10)翌年竹之下休蔵の着任をみる。

体育教官室は新構想をもって、活潑な運動を開始する。即ち「体育科」の新設である。

体操は明治以降課目としては実施され、教員養成としても「臨時教員養成所」を設けて行われてきたが、本科ではなく、短期の学科となっていた。

「体育科」新設(昭12)によって、体育ははじめて4年制度の本科となり、文科、理科、家事科、体育科として肩を並べ、体育科教育専門領域がはじめて学科として研究教育の場に位置づけられることになった。2.26事件がおこり、時局は風雲急になる中での「体育科」の新設は、当時を負った佐々木等、戸倉ハル、竹之下休蔵及び同校の進歩的な意欲と識見の実現であったとみられよう。

体育科は体育・音楽を専攻として、(免許状:体育、音楽、教育、修身)カリキュラムが整えられ、(略年表参照)音楽領域は、小松耕輔、平井美奈、宅孝二、奥田良三、豊増昇、遠見豊子ら優れた芸術家が教授として着任した。

運動文化と音楽文化の精密な連合をひらく専門的な学究の徒を求めるという理想を掲げた新学科の設立とみられよう。

因みに、毎日7時間(土曜4時間)のカリキュラムや音楽の個人レッスンの徹底にもその片鱗をみることができよう。俊秀の教授との個人的接点が、学ぶ側に及ぼした影響ははかり知れない。

体育教官室は、他方に「女子体育振興会」(昭11)を結成し、年毎に講習会を行って全国の教師に新しい知識と実践の場をもたらしした。

また「女子体育展覧会」(上野松坂屋、昭12)を開催し、女子体育の史的展望の展示とともに屋

上仮設舞台上でのダンスの公開演技を行う等、社会に働きかける、ひらかれた活動をも展開した。

更に「子どもと女子の体育」を刊行（昭11）と出版を開始、広く、全国レベルの視野をもって体育研究教育の開発に踏み出している。この年月の先駆的構想をうかがい知るものであろう。

しかし、時局は急速に悪化し、学徒動員（昭19）が始まり、造兵廠、皇国1359号工場（長野県中込）など、各学科、学年はそれぞれ各地の動員の場を働くことになる。

当時、研究科生から教官室勤務としてこの場に立ちあった一人として、戦場への学徒出陣は勿論、銃後においてもいかに多くの青年期の青年が心に深い傷を負ったかは、記しておかなければならない。同校視察の陸軍軍人は、校庭の一隅のコスモスの花をさし、今は日本には、一坪の花を植える余地はないと叱責した。一坪の花は生きる支えであることを理解してはもらえなかった。当時はすでにテニスコートは、畑となっていた。戸倉ハルも群馬県の農業動員引率となった。

明治・大正・昭和と時代の教育研究の推進力であった同校は、敗戦後新制大学制度の中で「お茶の水女子大学」（昭24）となり、体育科は、「教育学科、体育学専攻」として位置づけられた。体育や舞踊が、ここで独立の学科として、研究教育領域を認められるには、まだしばらく困難な時をもちこたえなければならなかった。（参照：シンポジウム特集「戦後50年の舞踊教育」）

## II 人——そのプロフィール

両先生に直接接しることができた一人として、そのプロフィールを語ることは、ここでの重要な役割であろう。

三浦ヒロ先生には、研究科在学中（昭18）に、生徒主事前田の多先生のお奨めでお目にかかることになった。“後継者がいないと嘆いていらっしゃるから——”というので、“創造的芸術経験”を研究テーマとして進学した私に声をかけて下さった。僅か2夜であったが、先生は情熱を傾けて、その舞踊観をお話下さった。かねて碩学の人として尊敬していた身には思いがけない機会であった。話し終えられた先生に、率直に私のひそかな願いと研究目的を話し、ご教示をねがった。すべての子どもたちや若者に創造的芸術経験を——という考えである。しばらくの沈黙の後、先生の答えはNOであった。“創るということは誰にでもできることではない”という芸術の才能を重んじるお考えからの解答であった。先生なら理解して下さるかとおそかな期待を抱いていただけに落胆した。後々このしばらくの沈黙の意味を推しはかり、この厳しい要目遵守の制度下であって、また、教育現場の指導力をも考えあわせ、純粋な理想を簡単に容認することはできないと判断され

たのであろうと推察した。しかし、当時、恐れを知らなかった身には、たとえ無理であり、実現不可能と思われたとしても、理想の火を先生にこそ掲げていただきたいと願っていたことも事実である。その後、いよいよ戦時態勢強まる中で、お話をうかがうことはむずかしくなり、この2夜の次の機会は得られなかった。

しかし、しばらくの後に、国語研究会の方々に「遊戯」指導をされる実践の場を参観する機会をいただいた。先生の舞踊観を直感させる、心と身体をつなぐ指導は、比類ない独自のものであった。例えば“お祭りの晴れ着の美しい袖をいとおしむように”と片腕をあげて袖を見る動作をひき出す、その気持をひき出して動作を感情の溢れたものにする指導の場面は、「感情移入」の論——自己の感情を自己の内から対象に投影し、体験する美的享受の作用を直感させるものであった。芸術と教育哲学の論究の姿勢から生まれた珠玉の指導と感受された。

戦時、戦後は転換期の多忙の中で、時折人伝てに活動の様子をうかがい知るだけで、直接お目にかかることなく、長い空白の日が続いた。しかし、ある日、思いがけなく先生から連絡をいただいて驚いた。「松本さんのなさっている“フジ羽衣”の舞台を来年は観にいきます」という伝言であった。空白の時間が一気に縮まって、先生が永く私の発した質問を心に留めて下さっていたことを知り、胸を打たれた。ご逝去になる一年前のことであった。御覧いただくことは実現せず、他界されたが、その後、身体運動と芸術表現の両側を具有する舞踊を見つめ、教育を考えつつ歩くことになった年月の中で、先生が抱かれたであろう理想と現実のはざまの諸々の問題をあらためて自身に痛感することになった。

最後の著の中で「自由」の意味を問いなおされた先生の提言は、これからの文化と教育、個性と創造性の人間社会を考える警鐘となるであろうと今も感じている。

（注）「フジ羽衣シルフィード」（主催：羽衣まつり実行委員会：清水市）は、三保の松原の仮設能舞台で'87年から行われている創作舞踊公演。東京5大学の学生及び静岡県下の学生生徒の作が、篝火のもとに演じられる。企画、松本。

因みに三浦先生は晩年長く静岡県用宗に住まわれたので、この行事を耳にしておられたのであろう。

戸倉ハル先生とのはじめての出会い、別府温泉の夏、偶然同じ旅館に泊まりあわせた母を見かけ、部屋を訪れて下さった折である。

先生は香川県丸亀高女から東京女高師家事体操科に進まれたが、丸亀高女在学中、家事科を担当

して教壇に立っていたのが母であり、この邂逅の場に居あわせた小学校4年生が、後日、先生のもとで学ぶとは予想も出来ないことであった。

東京女子高等師範学校に前述の「体育科」(体操・音楽専攻)が新設され(昭12)、入学、4年間を学び、卒業後奈良に赴任して木下竹次の築かれた合科学習に接し、自分自身の専門分野の現状に疑問を抱いて再び研究科に進学。この時から公的私的な場において、戸倉先生の生涯の道にかかわることになった。

研究科進学は道はひらかれたものの、現実には厳しく、真珠湾攻撃後の緊迫した状況の中で、動員態勢はしかれ、空爆の日々となる。東京女高師にも焼夷爆弾が落ち、寄宿舎は全焼、造兵廠動員のかたわら、学内では、伝令班長として駆けまわる事態の中で、“創造的芸術経験”を問うことは到底叶わぬ夢かと思われる日々となった。

しかし、先生は、空襲警報解除となるや否や、直ちに防空壕から出られ、コップ一杯の水をぐっと飲みほして気分を一新され、“さあ、松本くん始めよう”と声をかけられた。爆音がまだ耳元から去らない私たちのとまどいなど、問題にもされず、体育館で「教材」の検討をはじめられる。戦時色に塗られた要目として今日にその時代を語る「音楽運動」の教材の検討である。先生の出されるテーマで教官室のメンバーがそれぞれ踊って、試みをお見せすると、先生はあれこれ指示し、修正され、また踊ってみるという習作の階梯。

“踊り子はつらいね”など仲間とひそかに洩らしあいながら、先生の熱意にいつの間にか引き入れられる、純粋な時間があった。どんな状態の中でも、あくまで求め、試みられる芸への精進、芸への執念には打たれた。戦時を忘れる一刻であった。

「ブレッキング」を改作して「こまの動き」とし、「海ゆかば」「愛国行進曲」に振りつけ、「みのり」の試案を検討しながら、律動を堀おこされる先生の気迫を感じる日々が続いた。外来語のステップを漢字になおす試案も行った。

ある日、体育館の正面鏡の前にずらりと陸軍軍人が並ばれ「教材」の数々を踊って検閲?を受けることがあった。ダンスの存続が問われているのだという風聞の中で、力いっぱい「くろがねの力」を踊った。体育が“体錬科”となり、“戦力増強”の教授要目がでる時である。“くろがねのちから、トントン”とラストのスタンプを強く踏みしめ、汗がポタポタと落ちる中で、優美・優雅の「遊戯」が律動の「音楽運動」として生きのびようとすることを予感した。「遊戯」を守りぬかれたその頃の先生のご苦勞を真に知ったのは、すべての基本ステップやダンスを漢字に書きかえた「一拍跳歩、追歩、振脚跳歩…」(注:スキップ、フォローステップ、マズルカステップ…)の教授要目が世に出された時であった。(昭17、昭19)(前掲の表参照)

後日東京オリンピック開催前後に「体力」論が高まり、体育の目標として強調される中で、学習指導要領の作成委員として苦闘する私に対し、先生は、“自分の時代とどちらが辛いだろうね”とフツと洩らされ、「松本くん、もし納得できなかったら席を蹴って帰って来いよ」と強い眼差しで見つめられた。日頃、太陽のように大きく温和な笑顔の先生には想像もできない、秘められたシンの強さを感じ、身のひきしめる思いがした。“ダンスを守る戦い”への教訓として長く心に刻んでいる。

しかし、文部省の各種の委員会にかかわられた国立大学の教授として、先生は文部省指針を常に重んじ、公を立てられた。そう言えば、省みて、戦後、初の学校体育指導要綱(昭22)の委員として多くの先輩と共に討議し、委員総会で「ダンス」として決定され、創造的な自己表現が全面に出された頃、理解者は少なかったが、先生はある日、「私は二階堂先生に私淑した。しかし先生と同じには行わなかった。松本くんも自分の思うとおりやれよ」と励ましの言葉をかけて下さった。「松本くんが“創作”にするから、私の“作品”はいつの間にか“参考作品”と呼ばれるようになってしまった」とこぼされたりもした。胸の痛むことであった。

先生の創作の場には常にひたむきで純粋な姿勢があった。詩に涙し、歌曲に陶醉される先生は、それだけにピアニストの演奏する一音のミスタッチにも眉をひそめられ、また踊り手の一挙手一投足にもピタッと揃うことを要求された。雑音を許さない洗練を望まれた。表現とは磨き出されるものであることを感受した。先生の作品は、音楽に溶融した心情の表現として、むしろ美しい動きの象徴性をもつ。幼児の表現の童心あふれる世界は、先生ならではの風格をもつものであるが、あて振りではなくここにも具象から捨象への美的感覚が働いていることを感じ取ることができよう。

先生には、研究科進学直後、文部省講習で札幌へ、札幌から東京を経て、下関へ、関釜連絡船にのりかえ、釜山から朝鮮半島を経て満州国新京へと直行する長い旅行(講習会助手)の思い出をいただき、また、晩年の偉業となった、国際会議招致を掲げた日本女子体育連盟の創設等と、多くの責務をいただいた。直言できる弟子として信頼を得、お手伝いをさせていただいた、と感じている。

大正、昭和前期の舞踊教育の中核の人として三浦ヒロ、戸倉ハル両先生は、三浦先生を感情の陶冶——個を堀おこしての表現と舞踊観の提出とみると、戸倉先生は歌曲と共存する美しい動きの感覚の表現と運動会の華として、体育を開拓し共に学校教育における舞踊の先導的役割を果たされたとおもわれる。独自の「教材」と「指導」を提出された偉大な業績は、これからこそその根源をたずねなければならぬ啓示をもつ世界であろう。